

断乳と離乳

子牛が下痢…。一時的に断乳をすることがありますが、これは適切でしょうか？



栄養面や環境面が整うと、子牛は順調に成育を遂げ、一日当たりの増体は0.8 kgほどにもなります。多くの農場で離乳の目安とされる約2カ月令までには40～50 kg増体することになりますから、生時体重のおよそ2倍に達します。

これほどの成育を支える主な栄養源はミルクです。特に最初の3週間ほどはスタータを摂取していても、これを消化吸収する能力がほとんど備わっていませんから、ミルクの重要度は一層高まることになります。

哺乳の意欲を低下させてしまった子牛は、すぐに獣医師に処置してもらわなければいけません。哺乳への意欲のある子牛まで断乳してしまうと、それがたとえ半日であっても、一気に急ブレーキがかかったかのような飢餓状態をつくってしまいます。

もし子牛の下痢の原因が「細菌に汚染されたミルク」であった場合、これを見直すことが先決で、バクテリア数の高いミルクが繰り返し与えられている場合は、添加物や薬なども大きな意味をなさなくなるでしょう。

大量の水分を体から奪う下痢は、体組成の大半が水で占めている子牛にとっては死活問題です。哺乳と哺乳の間に十分な水分が得られる配慮は欠かせません。



気温	20℃	15℃	0℃
ミルク kg	2.8	3.5	4.3

左表は体重 50 kgの子牛が成長する分は別として“生きるためにだけ”必要なミルク量です(エネルギー

ギーベース)。順調な成育を確保するためには、1回あたり2ℓ(1日4ℓ)の哺乳量では、大幅に不足していることが分かります。人の気配を察知したとたん、子牛がヴェーヴェーと鳴き始めるのは、強い空腹を訴えている可能性もあるかもしれません。



一方、子牛にとって「離乳」も大変なショックでしょう。

離乳時、他のストレス(たとえば混み合った群に移動、一気に環境温度が変わる、除角など)を緩和する配慮が大切です。そしてミルクに頼っていた栄養分を速やかに他から充足



させないと、離乳後がおおってしまうこととなります。これを補うため、スタータの摂取量が確保されるかがポイントになります(約1 kg/日)。

離乳には「一気にやる方法」と「徐々に減乳してからやる方法」があります。どのような違いが子牛にあるかを実験したデータ*から次のことが推測されます。

- ▶ 徐々に減乳するとスタータの食いはやや増えるものの、全体としてのエネルギー摂取量はいくぶん低下する
- ▶ 離乳までの成長は、一発離乳でも徐々に減乳して離乳した子牛でも顕著な差がない(ただし、あまりに長期間減乳すると成長速度は落ちやすい)
- ▶ 一発離乳では、離乳後の数日間はずっとスタータの食いが上がらないことがある

* 実験では、離乳操作前のミルク摂取量は約12 kg/日、離乳は早めの41日目でした。
Duration of weaning, starter intake, and weight gain of dairy calves fed large amounts of milk (B.C. Sweeney, J. Rushen, D.M. Weary, A.M. de Passillé)

成功裏な離乳は、『発育の停滞がなく、子牛が鳴きわめかない』状態によって証明されます。離乳ショックを和らげるため、生後3～4週間はミルク主体でスタータはおつまみ程度(水は必須)、その後1ヶ月間はスタータと水を併給するもミルクは大きく制限しない、そして管理上可能であれば離乳の数日前からややミルクを減らし、スタータによりシフトしておく…といった流れが無難なようです。



参考:「哺育・育成牛、移行期牛の管理(Robert E. James, Ph.D.)」全酪連・酪農セミナー

